



門邊  
號 967  
卷 6

本清

漸○沙濯錦 喜童兒方面縷金逐

段○寄○為容夢殘妖斜月蓬廬琴

鄉○音○識○函極孝忠榮頭尤終重奸惡

滅○亡○固○可宜誰認勸懲為一助人情為

察○之○平○時

右錄觀雜劇作以代序辭

山月庵 京鶴



元明行單卷之六

定文堂藏





芭蕉堂

象とる  
人み  
好乃  
善

大

深  
たき  
なり  
松の  
春



貞婦  
古乃



美事一  
や  
又言  
ちうん  
そこの  
山月居

宇羅上則宗



紅梅や  
系鶴  
冊抄

この  
教ふ  
れ

娘  
楼子







嵐峽花月奇譚卷之六

平安 瀬川恒成著

第六回

勇婦賊と殺し一夜東よ奔る  
双士勇と振ふて美人と助く 話

こゝ小宇良上則宗公の愛妾よ古乃花といふりりり。歳は  
二十とさるゝること。まや二三歳ありりれども。容儀優よやそ  
く。心ざし正しくて。万更信実しりりれれば。則宗公は  
寵愛も大りこゝろ。ひんるるふ。一應仁元年の春より  
細川山名家に戦ひも。世間福あつたれば。宇羅上との



御所ちのく。出張し宮闕と守衛し。邸へ還るは古の花  
こと。もまた三年はあまべいもつら果てらるもくは古の花  
の中こそよゆんも。寐房さびしくも山鳥は尾上へさく  
秋は夜のあざく一夜とひらり寐の。寐さちうらなふ  
徒然と慰めよとや聞れ戸と漏月うげとそりふと聞説  
黄花戌頻年不鮮兵可憐閨裏月偏照漢家宮と口  
ずさそらん中華人の心もつまり身のうへにおのひくべ  
くさめうかしく。何ぞさあつくそくくくく。一日閑ま  
る窓れ下よ机と直させ。列女傳と読わたりしご。

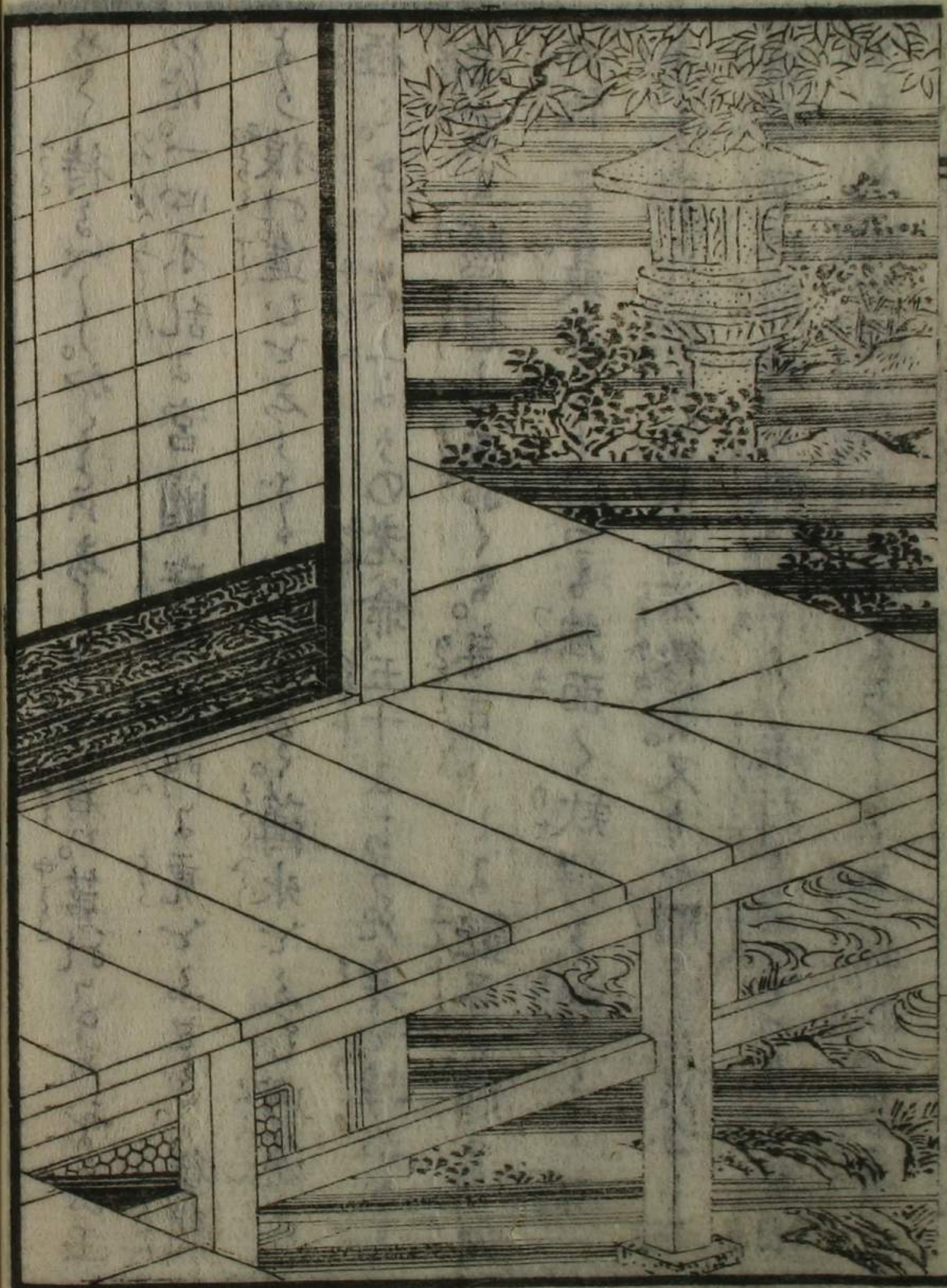
嗚然として嘆息し。いつとも勝て男とあそ。そらひ揃ひ  
貞操節義。千代の後れ今の世まで。芳なりし名と遺  
しあふ。かきこた人の行状や吾儕いし身はあまきとも。  
節義又貴賤の差別なり。君れさちよ命とあげけし。  
一ツは操とりし。世れ人の目とあざちりさんら。代  
君れ惠寵と蒙る。高録高知とく。夫とく。人  
し。謀反と企て。国家と畧奪んとす。悪逆不道乃  
蛇塚典膳悪さも。勢ひひらりぐ。い  
し。忠心無二の鎌田父子それ外の人とも。ろくは逆て



やしことと逐まき。或いはおしこり閉門せられ。主家此より逆賊  
と。平らぐべき人あり。其中最もよくしるは篤実秋月  
清英。今の世にあり。大西もまた美理とある。人あ  
り。りりとおひいし。是等よく渾彼賊が一味の人数と  
あり。りりよし。主家おん為をおひい。偽りを渠と与し。  
うし切せんとの心ある。但しに慾も迷ひり。よりのやと  
おひいども。測るが死の人心。何を此より殿さるへ。つげ  
まつせ。おひいども陣中へおひい。外のさるへ。い  
く。雨はとも。此より打まておひい。お家は滅亡。指と屈

めく待まべし。かきこい。あき。我君の弟れり。おひい玉  
の心。一心不乱。宮闕守護。前門は虎とふせき。後門  
より狼れ。進むとま。ごご。薄氷とふむ。御運乃  
極。まご。其上よりの老爺。五十より死身と持ふ。ご  
妾家は懸想。正ふも。毎日。ご。艶唇と贈。ご。死  
口説こそ最ふ。ご。ご。強面く款待。贈。ご。ご。  
手もふま。押くせ。ご。不微心。ご。又りや贈。ご。ご。ご。  
彼長安は節婦。ご。ご。ご。承引。ご。渠とつり。ご。酒  
ご。ご。ご。時と伺ひ。ご。ご。ご。刺。ご。ご。ご。五判状。ご。ご。ご。







君へさげん悪黨の人數幾人有りとも。其根を断ぎ  
 枝葉は自然と枯果べし。猶不徳は渠は美と立再い  
 反く者あり。血判状を證して。明く地は罪をせり。一  
 刑は行いん。呼く甬ありと。腋肚裏に。思案を極むる古乃  
 花が。心はしらへおしてや。難波吐く。咲あひの。春より  
 も猶香しく。れ。かくといふ。典膳の。恋と慾との二道よ。  
 ん。迷ひ。心は。元々の天窓より。似合。り。ね  
 懸心相合。女は童しく。おくる。古乃。巻の心より。こび。い  
 つよ。面色と和け。慌忙。昏。封。お。ひ。ひ。

よ。終。て。數。ぬ。奴。家。と。ん。斯。ま。お。り。ひ。玉。り。る  
 こと。最。有。り。事。ふ。ん。か。く。ま。で。ふ。り。と。み。心。り。と。い  
 一。点。ま。へ。て。昨。日。ま。で。強。面。で。口。お。り。軍  
 此。場。は。出。ま。り。て。明。日。に。命。も。た。り。り。ぐ。と。つ。り。還。り。ぬ  
 ん。と。も。を。り。り。ふ。り。主。君。と。兩。夜。に。墨。と。身。う。ん。り。  
 當。時。政。事。と。預。り。主。君。よ。お。と。ね。威。勢。の。蛇  
 塚。わ。は。従。へ。何。く。く。ね。我。身。あ。と。迷。ひ。と。り。り  
 いら。で。り。強。面。の。欺。待。と。り。り。回。忘。中。さん。と。膝  
 下。ち。の。ひ。と。寄。て。墨。す。り。わ。が。硯。に。海。ふ。り。想。ひ。い



坊方こそ。勝<sup>まさ</sup>にわれども浮雲の定<sup>ま</sup>ぐらん男<sup>おとこ</sup>れ心<sup>こころ</sup>りや  
 奴家<sup>やつらん</sup>が心<sup>こころ</sup>操<sup>あそ</sup>ひをえんらんさめあふりと。是<sup>これ</sup>を固<sup>いつ</sup>辞<sup>じ</sup>いでし  
 うと。千<sup>ち</sup>束<sup>つ</sup>よおすべ玉<sup>たま</sup>章<sup>あきら</sup>よ。ふうきみ心<sup>こころ</sup>わたりあへん。今<sup>いま</sup>の  
 何<sup>なに</sup>とて固<sup>いつ</sup>辞<sup>じ</sup>たふらん。奴家<sup>やつらん</sup>ととてさせあらん。今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>潜<sup>ひそ</sup>ま  
 吾<sup>われ</sup>部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>へ潜<sup>ひそ</sup>ひて入<sup>い</sup>らせあへよりし。彼<sup>かの</sup>邯<sup>かん</sup>鄆<sup>ん</sup>の枕<sup>まくら</sup>あふ  
 後<sup>のち</sup>ど。樂<sup>たの</sup>しき夢<sup>ゆめ</sup>やむまびたまふんと。いと細<sup>こま</sup>中<sup>ちゆう</sup>くよ合<sup>あ</sup>ひ  
 る。それ水<sup>みづ</sup>莖<sup>かき</sup>れ何<sup>なに</sup>ともんもいと美<sup>うつく</sup>しき返<sup>かへ</sup>事<sup>じ</sup>。使<sup>つか</sup>の童<sup>どう</sup>女<sup>にょ</sup>を  
 慰<sup>なぐさ</sup>勞<sup>らう</sup>て菓子<sup>かし</sup>あごせし。殷<sup>いん</sup>勤<sup>きん</sup>よ款<sup>けん</sup>待<sup>たい</sup>還<sup>えん</sup>し。腹<sup>はら</sup>心<sup>こころ</sup>  
 の侍<sup>さむらい</sup>女<sup>にょ</sup>よ心<sup>こころ</sup>と得<sup>え</sup>る。種<sup>しゆ</sup>くと酒<sup>さけ</sup>肴<sup>やく</sup>の儲<sup>たくわ</sup>へて。其<sup>その</sup>日<sup>ひ</sup>の暮<sup>くれ</sup>

ちと待<sup>まち</sup>わたり。運<sup>うん</sup>や尽<sup>つ</sup>らん典<sup>てん</sup>膳<sup>ぜん</sup>の。艶<sup>えん</sup>唇<sup>しん</sup>れ返<sup>かへ</sup>事<sup>じ</sup>を寔<sup>まこと</sup>とお  
 りの女<sup>め</sup>れ童<sup>どう</sup>を先<sup>ま</sup>よ立<sup>た</sup>し。古<sup>こ</sup>乃<sup>の</sup>茶<sup>ちや</sup>が部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>よ入<sup>い</sup>。奈<sup>な</sup>何<sup>なに</sup>よ恋<sup>こひ</sup>  
 人<sup>ひと</sup>日<sup>ひ</sup>外<sup>がわ</sup>より。艶<sup>えん</sup>唇<sup>しん</sup>こそ口<sup>くち</sup>説<sup>せつ</sup>人<sup>にん</sup>ゆき言<sup>い</sup>し。その心<sup>こころ</sup>を尽<sup>つ</sup>  
 せども。聞<sup>き</sup>きけあ。強<sup>つよ</sup>固<sup>こ</sup>りし。今日<sup>けふ</sup>のいりる。夙<sup>しやく</sup>れふを  
 てや。此<sup>こ</sup>方<sup>かた</sup>へ漕<sup>そう</sup>寄<sup>よ</sup>せよ。よ。返<sup>かへ</sup>事<sup>じ</sup>れ玉<sup>たま</sup>章<sup>あきら</sup>よ。今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>出<sup>で</sup>舟<sup>ふね</sup>と何<sup>なに</sup>も  
 今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>出<sup>で</sup>舟<sup>ふね</sup>と何<sup>なに</sup>も。乗<sup>のり</sup>合<sup>あ</sup>んともききりりし。耻<sup>はづ</sup>  
 ても。ぬ戲<sup>あそ</sup>言<sup>ご</sup>。侍<sup>さむらい</sup>女<sup>にょ</sup>等<sup>ら</sup>の屏<sup>へい</sup>風<sup>ふう</sup>のうげ。襖<sup>ふすま</sup>れそ。身<sup>み</sup>よ  
 しく。目<sup>め</sup>ひき袖<sup>そで</sup>ひき。笑<sup>わら</sup>ふ心<sup>こころ</sup>も付<sup>つ</sup>じ。古<sup>こ</sup>乃<sup>の</sup>茶<sup>ちや</sup>が顔<sup>かほ</sup>よ貪<sup>ねん</sup>視<sup>し</sup>く  
 かりりる。鬼<sup>おに</sup>角<sup>かく</sup>す。間<sup>ま</sup>酒<sup>さけ</sup>肴<sup>やく</sup>。持<sup>も</sup>出<sup>で</sup>りれば。古<sup>こ</sup>乃<sup>の</sup>茶<sup>ちや</sup>の。お



盃と取奉て叮嚀と進るまど典膳いよ心と赦して順杯  
 逆杯飲ふもさうめふが秋夜も漏刻高くおしづ  
 まる。夜中とくそいふり小りれ典膳の大きく酩酊で狼  
 籍しる杯盤は付付さる古乃茶の手とり閨房  
 へど入より古乃茶の豫てより心よ期しるさふれば  
 絆ふらん渠が手よころされんのも女がら一城の  
 主此側室言甲斐なく身とけがされんや追付ひげ首  
 搔おきて国は患ひとのぞくべし。南無八幡大菩薩。  
 忠臣貞女と捨あつべし首尾よく討しめさるべしと心

ねん念とつ。護身カと匿し持てとり小臥房をぞ  
 入より運の極まり蛇塚典膳色小迷ひて古乃花が謀  
 り陥りし。とあまらばして今の吾手活け花とおひりり。  
 さうさうさう心もみく酒よ酔つ年もまや五旬よ  
 ちく死身少しられん大く色小もおどきさび酔さるまよ小  
 高しびさし熟睡し光景ふまが古乃茶の天れ与へ  
 と。密よよろこび潜と起出匿し持る懐剣を抜るが  
 り悪逆は天罪おひあまらべし。咽喉まがごとく突大  
 通さ典膳の苦と一声さげびも敢て七顛八倒喘く



雨とどろくも立止。首りを切て懐中さぐり。帛紗まつこ  
 一ツは巻物。辱しと押しさ。我懐に納めり。天地  
 と拝して衝立上り。謀反の張本蛇塚と古乃峯がうら  
 取らる。主家れうめと思ん。そのい出合る吾濟とさけ  
 よし。呼る声とさうつけり。菟出る若草小秋秋野  
 桔梗も甲斐くく。妻端折して長刀引さげ。邸  
 本望とげまひ。雨らむや。此邸とのがれりひて  
 殿さゆれ御陣処へあちあへ渠いやく討とりあへど。  
 渠が郎兒の鹿之進親におとす。ぬ不道れ曲者。此よ与る

人くも。又少とくへり。此邸のさうらよ誰一人とのそと  
 ふるまき人いふ。いさくとすむまが。古乃峯も寔に尤  
 と。侍女等が諫言よまらせ。う門あり出んとす。と。  
 番兵見つけとさむと。答へも中びこ。いと桔梗雑刀  
 取のべ一列。切てぞすつ。其間よ。小秋小門お開  
 け。秋野若草。ホい古乃峯と。中よ田を潜びひく。  
 堀川をらと東北へ御処とさうてぞさうと行く。うら  
 此方より夥れ追捕人松明挑灯ふりて。追  
 る追菟さうらふ心。矢猛と急まども。女れ足れさうら



ねいもちや間ぢりくありまらり。古乃若後方々顧る。  
 敵をちりく寄る御処へいませ道と行く。今の  
 のどく道もあし。是まてあり侍女も返し合し  
 討死せん。蛇塚と討取られ女身は念願叶ふなり。  
 今ハ何と期はへさすと。ふまれ四人はこしと。  
 命ハ道理至極ふまも。死なやれく生難かり。女処を  
 吾ホよまらり。側室のやく殿は陣処へいそと  
 めくとい問も何と。主家は執権蛇塚どのを殺  
 害せし古乃若どのと。謀反不等しと罪人ふまに。

女ありとて用捨いあし。尋常手と廻されよ。異儀よ  
 およぐ片端討てまてよと子息ある。鹿之進どの命と  
 ろけ。宮越玄蕃向ふなりと。旬富は嗚呻と耳もけ  
 べ。四人は侍女古乃若諸も。君は御恩と忘却し。  
 謀反は黨する。国賊宮越殿はねがひてらる。間誅伐  
 せんと思ひし。跡追来る天誅のぐれは。飛ぶ火  
 入夏は虫。継母あて三途は河原は姨は誘き来り  
 べし。女ありと漫る。後ま悔そと罵る。持る難  
 刀琉くと。水車よふりまらり。右は稚臥左は當女処と



最期の憤激突戦。當ると幸ひ切伏せしが、手は立りの  
 かりりり。甬まとも追捕人の追ふ。馳加ふる新千乃  
 兵士多勢。不勢は女業若草桔梗の深痕を負ひ。  
 小秋萩野の戦没して。今の古乃卷は一人多勢。中  
 とり囲まざる。すゝ危くへる折り。誰といまはるべ  
 旅装して帯刀し。二人は男。齊しく刀拔つまゝ。  
 大喝一声。唾をくちや。多勢は中へ割る入。古乃卷と  
 中へ圍ひ。縦横無碍。斬立まへ。追捕人のこれよ  
 辟易し。少しくへへ引退け。彼二人の勝よの

已。此処より。彼は出。秘術を尽し。戦ふまじ。叶  
 ぬゆせと夥士ども。逸足つぎて逃げまじ。何国を  
 りと追うけしが。長追無用と一人は男。声とくまを  
 寔よりりとも。原は処へゆり。これ痛ま。古乃卷は  
 深傷。弱て身もつりて。傍ある草の原。ぐらり臥す  
 正躰あり。二人はらうり立り。この浅きと脈を  
 最細くと通ひ。肌層も。冷ざれば。慌忙しく  
 印籠は。茶をふくち抱お。耳のふ口。さうり。  
 側室と呼活ま。古乃卷は。稍くと目と見ひ。







不審。追捕人の蒐る吾侪とす。かくも勲をなす。足下達いづる人ぞ。問ふ二人の力と得て。吾も返らせ。あはれ。心たし。小持あへ。吾も。譜代の郎黨。鎌田一子。冷海之助。吾の秋月清英が一子。桂太良。今光景いづる故。言せ。いづくぬまき。古乃。力を得る。忠直ぬ。清澄ぬ。今心もた。今宵の光景。不審。おぼされん。謀て足下。通。蛇塚。悪逆無道。謀反の企。運。

の。奴家小懸想。正。艶唇。贈れ。是。手。又。人。口。強。款待。熟考。殿。お。偽。渠。従。心。時。窺。刺殺。国家。患。縣。心。想。幸。お。心。折。女。童。因。返。事。渠。釣。酒。醉。畧。奪。侍。女。等。首。討。一。卷。血。判。状。畧。奪。侍。女。等。



とてふも殿に御陣と志し。此処まで落のひくま  
 女は足はさうどひの遠は此処より追とせむま。  
 侍女どもハ励し軍を討死し。奴家もまうとす。危  
 其処へ來り極ひまなり。此上を幸ひ命の親  
 礼ハ述ふことばもふ。さけハ足下も彼奸賊が謀計  
 二階アと。邸と逐まひしよし。噂もさうしが奈何  
 ぞや。問まて忠直されん。先日殿に命と蒙り。竜  
 丸の宝刀と迎んとく国はゆる携へるり。改められ  
 似もつらぬ鈍刀と管中へ納りし。典膳は是と

とて某が途中より。すりくとりと誣言しつ。父盛直  
 がちうに頃持病れせんと指おとせり。出仕せむり野心  
 ありま。うとぐひと吾悪事と。かくさんちやよ人と誣  
 吾儕は切腹とせんとせし。其座は秋月居合せし。や  
 るがれ命と助け。一年と日とるり。宝刀はせんご  
 せよと。情愴より危き命。それの助り得るま  
 とも。父盛直ハ其連坐は閉門中つけしよしなり。いまご  
 宝刀とくまよ。狂閉門とひくぬあま。かくて熱  
 おりま。宝刀とるり。清くさりし。我涙アとら



い、あつぐ。路次も取らまゝ一覺あつれば、国に有る  
 其内は、紛失せしやうさぐひふ。一度、本国へ立ち上  
 了。邦太夫松浦姓と、どりふ商も穿鑿金で、去  
 まざるのいよも、と。本国さうてく、道舞子に濱  
 の松原も、一人の聖僧も出遭。宝刀に有処、知  
 り。やも長しとるふ、序も上へ上るん。抑  
 舞子に濱とつ、一の谷より少し西、山に倚り海  
 に浴ひ、浪うらざりの海道に、白沙の玉と布、とく  
 姫小松疎ま生る。木立に間より、淡路島山、紀の国

さへも函へつ。沖は往交大舟小舟。秋は入江に柳葉  
 散、泛びる。其数をまぐぐ、其景色に  
 妙なる。是は日本無双とつべし。されども須ナ乃  
 浦ありし。大藏谷といふ。凡四五里が其間、  
 中、蟻の竹占屋も、休息へと処るけま。松がね、腰  
 打ちけ、其絶景と眺望する時、一人に旅僧通る、  
 まり。身は綴ま、法衣を着、蔽ま、草鞋を、  
 藪に杖と携へ、道徳尊と仙僧と、かゝる  
 蔽衣と身、まゝも。耻る面色も、其



威儀の堂々たること尋常の類より過ぐつりくと進  
より某が傍る松が根は同じ腰りけ某が只と  
つゞいて足下備前の宇羅上どの家臣あはれや  
と問うけしきまゝおどろかぬ誠は甫ありと回心  
り此度の刀は詮義のうや出ぬいともれぬべし  
されどもいさぎ時々ねが穿鑿しとも手を入ぐり  
近頃御内は内変りしん。此内変れ治るとも宝刀の  
殿におん手を入ん。づれ遠くもあはれ内本望のしげ  
あはれん。只今他国へ往らひも宝刀とてづらひあはれんハ  
あはれんハ

て功あさるあまが直さる都へ立ちへて相識れんと  
身としそめ。時のつゞきとまらぬと。叮嚀と諭し  
其辞の神も某心と思ふ中。是凡庸の人をわ  
ら。せよ。神仙権者なり。つゞき詞と昇りして  
奈何も仙僧に命じり。宝刀はせん。往らぬ  
其故より言ひし。仙僧をよくこそし。あはれ某何の  
幸ひも。仙僧に見へ。内変れ治るとも宝刀は。再び  
還る前表も承り。安堵し。願ふ宝刀は有る  
も。詳し示し。あはれ。尋ねし。彼仙僧の。微



笑しく宣ふ中。最愚なる男の。内変の治まること。こ  
再び手入んとつべ。言はれもあまき。宝刀は有処何の  
たづねる。みりある。借坊宝刀は失はる。是より三年  
前の。今都の内より。正しく来ん。春花乃  
頃池に中より手入べ。其とき怪しき。みりしん。  
盗し人の。不殺され。所持する人も遠く。人乃  
為よ。ころさるべ。原来此刀と偷し。家は守護と  
す。り。却て崇と蒙。家は火と惹出せり。  
足下是より都へ。昼夜洛中と巡行せよ。こ

すれ無二の良友と得。又一人は貞女と助ん。以人と  
心と戮し。万事と計らふべ。努る。とがひ。つとす。  
仙僧は去ん。袂はす。其名処と。問へば  
仙僧の後方。鉄拐山と指さす。貧僧は彼山に。栖  
一丸とつ。ものんと。瓢と平と。立さ。り。内変  
は治るとき。宝刀も。返らん。言ま。辞の真  
る。彼逆賊偷。所持する。と。ひ。  
何を遠くも。本望と。げんと。宣ひ。され。  
何を。頼母。斯過去。未来。明と。地



説人の尋常此人よりあつた。其教訓に従ひて却て  
 事は敗やうん其れ悔も及ばざると。おりんが仙僧  
 の宣ひし。辞は些し違ふるふし。是より推量る  
 べ。彼奸賊は亡んるも。宝は返るも来ん年乃。  
 春のうらととどぐべうら。思へば心は勇なり。吁このも  
 しの仙僧は辞や。吁神ありける聖僧の言やと。感  
 賞し物ぐれは。古乃蒼も是とさる。よろこびつ  
 まと彼仙僧は神ると嘆賞せり。淡海之助ふさび  
 つゆ中夫はとておとて典膳と討めいゝ其れよ。竜

丸の手は入ざりしうと。古乃蒼顔とふり。そけを  
 さくわど悪しき重たまる。蛇塚典膳。今日決りて  
 ちやくそくおが。竜丸もどよふ。吾侪が手は入らんよ。おそ  
 くり。残念さよ。爾はさうらる。彼仙聖は言まてく  
 天運は。つぎ至らぬおあは。それら仙僧の教示て。  
 在処まま上り。何の愁ふる。みくらあらん。指を  
 屈めて其れのと。待こそよろめと。つうは兩人は  
 りり。答へる。古乃蒼が美勇を賞し。且恙ふとと歡び  
 須更有て桂太良右左と見くら。此処は道中



大切の事と相譚あひまべと処ところ小こ何なに〜也。又邸やしきより追捕人あつかひ指さし  
 向むかんも量たかりぐ〜。まがく城方しろがたへ〜〜りぬ。彼衆かのしゅう六むが住家すまやう  
 といふは是これより近ちかくも何なに〜ぬ。桂井里かつらぎよりゆへに。身みを  
 匿かくさんより便たかりよし。いざ〜と言いりれば寔まこと尤なほと古ふる乃なほ蒼あふい。  
 秋月あきづき鎌田かたより従したがひる。桂井里かつらぎへぞい〜たり。

花月奇譚卷之六終



